

エラスムスの *Senatulus sive* Γυναικοσυνέδριον (1529) について

木ノ脇 悦 郎

1529年3月、バーゼルのフローベン書店から発行された新版『対話集』の新たな対話作品九篇の中の一編である。各版に新たに加えられた作品群を比較してみると、その版の出版された時代の状況が反映されるケースが多いのであるが、この版に関しては特別な共通の話題あるいは傾向が示されているとは言い難い。各篇ともそれぞれに短い作品である。

今回取り上げた作品 *Senatulus sive Γυναικοσυνέδριον* 即ち「女の議会」について、エラスムス自身は、その『対話集の有用性について』の中で次のように述べている。「『女の議会』において、私が伝えてみようと思ったことは、ある種の女性達の欠点についてなのです。しかし、かなり控えめにそれをなしているのでありまして、Juvenalis⁽¹⁾ の持っている様なある種のもの（激しく辛辣な風刺）を期待しているわけではありません」と。⁽²⁾

エラスムスの示そうとしたある種の女性達の欠点が何を指しているのかということについては、本文を見ていただくほうがよいと考えられるが、女性の虚栄心については、エラスムスの作品『痴愚神礼賛』においてのみならず、トマス・モアの『ユートピア』あるいはフランソワ・ラブレーの『ガルガンチュワ物語』等にも見られるものであり、一般的なものとして理解されるものであろう。勿論、エラスムスは女性のみでなく、男性をも視野に入れて、人間の持っている愚かさを痛烈に皮肉ったのであろうが……。

ところで、「女の議会」といえば、アリストファネスの同題の作品を思い浮

エラスムスの *Senatulus* について

かべるのであるが、⁽³⁾ 内容を全体として検討する限り、アリストファネスの作品とエラスムスの対話の間に直接的な影響関係はないといわねばならない。表題にしてもアリストファネスは Ἐκκλησίαζουσαι としているのに対して、エラスムスの場合には、Γυναικοσυνέδριον とそれぞれに扱っている議会を一方は Ἐκκλησία、他方は συνέδριον という用語でイメージしているのである。⁽⁴⁾

それでは、エラスムスは、女性による議会というイメージをどこから得てきたのであろうか。『対話集』の全体を英訳した Craig R. Thompson は、その原型をローマ皇帝ヘリオガバルスがその母のために「女の議会」を開催したという記録をエラスムスが *Scriptores Historiae Augustae* から得ていたのではないかと推測している。⁽⁵⁾ 更に、女性の服装に関する論議がこの対話の中心を構成しているのであるが、このことについては、エラスムス自身が、1516年に初版を出版し、その死に至るまで五版を重ねた『校訂版新約聖書』本文、ラテン語訳、注釈のうち、「テモテへの第一の手紙」第二章九節の論述が反映しているものと思われる。⁽⁶⁾

表題は、*Senatulus* というラテン語、あるいは Γυναικοσυνέδριον というギリシャ語の両方を用いているが、*Senatulus* はエラスムスの造語であり、おそらく、*senatus* (元老院) と、*senaculum* (元老院の会議場) という二つの語の合成されたものと考えられる。ギリシャ語表記とこの対話の内容からして、日本語では「女の議会」と表すほうがよいと思われる。

この翻訳と注解のために用いた底本は、エラスムスの校訂版全集 (ASD版) *Erasmi Opera Omnia I-III*, Amsterdam 1972 p. 629-634, と、ライデン版全集 (LB版) *Desederii Erasmi Opera Tom. I. Leiden 1703* (Rep. in Hirdesheim 1961) p. 842-844 であり、参考のために1679年、アムステルダム版の *Familiaria Colloquia* も参照し、Craig R. Thompson の英訳、*The Colloquies of Erasmus*, The Univ. of Chicago Press, 1965 p. 441-447 も参考にした。

コルネリア (C)、マルガレータ (M)、ペロッタ (P)
 イウーリア (I)、カテリーナ (CA)

C. 女の共和国の全てに豊かさと幸福がもたらされるよう、今日は喜んでこの集まりがなされました。ですから、公共のこと、品性のこと、有益なことに役立つ心に神が恵みをもって、最高の希望を与えて下さいますように、私達もこれから努力してみることにいたしましょう。

私、思うのですが、皆さんは男の方達が、毎日の会議でなしている仕事と同様なチャンス、私達(女性)は何と多く放棄してしまっているか御存じですわね。私達ときたら糸巻き棹や織機の前に座って、自分達の(大切な)問題をなおざりにしているのですわ。⁽⁷⁾ そうして、私達の中にはどんな政治的見識もなくなってしまうというような事態が生じますし、男の方達は、ほとんどただ慰みのために私達(女)を所有するようになるのですわ。それで私達は、人間と呼ばれるにふさわしい価値を失ってしまっているのです。

ですが、もし私達が始めたことを続けてまいりますと、皆さんは御自身の明知によって、願わしい事柄が叶えられるということになりましょう。勿論、私は不当な言葉を語らないように気をつけなければなりませんわ。私達は、自分たちの社会的地位を蔑ろにしないためにも、確かに安全には注意を払うべきなのですから。かの最も賢明なる王様がこんな言葉を残しておいでですわ。「忠告が多ければ、救われる」⁽⁸⁾と。

司教様方は公会議をなさいます。修道士様の集まりでも会議をなさいます。兵士達も似たようなことがありますし、盗人達でさえも集まって、相談をしますわ。それどころか、蟻達の群れも会合を持ちますわよね。すべての生ける者のうちで、ただ私達女だけが団結しようとししないのですわ。⁽⁹⁾

M. 必要以上にしばしば集まっていますわ。

C. まだ話は終わっていませんわ。私が話すのを邪魔しないで下さい。皆さんにはお一人ずつ発言していただく機会をさしあげますから。私達がしよう

エラスムスの *Senatulus* について

としていることは決して新しいことではありませんでしてよ。古い例をとりもどすだけのことですわ。私の誤解でなければ、確か千三百年も前に、かの最もすぐれた皇帝、ヘリオガバルスは……。

- P. あーら、下水道に投げ捨てられて、鉤で引きずり廻されて有名になった人を「最もすぐれた」ですって。⁽¹⁰⁾
- C. また、話の腰を折られてしまいましたわ。仮に私達がそんな理由だけで是認したり否認したりするのでしたら、十字架におかかりになったキリスト様は邪悪な方で、家で生涯を終えたあのドミティアヌスこそが敬虔な人間だと言っているのと同じことになりましてよ。それにヘリオガバルスが嫌悪すべき者として、咎められているのは、ベスタ神に守るように言われた聖火を投げ捨て、家の祭壇にモーセとキリスト様をお祭りしたというのが理由じゃございませんか。（その頃）人々はキリスト様を軽蔑しようとしてクレストス⁽¹¹⁾と呼んでおりましたけど。

ところで、そのヘリオガバルスは、公のことを相談するために皇帝が元老院を持とうと決心なさったように、その母君アウグスタも御自分の元老院をお持ちになったのです。そこでは女性達の問題が論じられたのです。ところが、男達はふざけて、あるいは自分達は別だといわんばかりにそれを「女元老院」と名付けたのです。このような例は、本当に何世紀もの間を隔てておりまして、ずっと昔からくり返されていることが思い出されますわ。使徒パウロが女性に集会でしゃべることを禁じたことは何も変わってはおりませんし、⁽¹²⁾ あの方はそれを教会と呼んでいたのですわ。それは男達の集まりについて言われたことですもの。でもこれは女達の集まりなのですからね。

ともかく、女がいつも黙っていなければならないというのでしたら、いったい自然は何のために私達に男と同じような流暢な弁舌や声の響きを与えたのでしょうかしら。男達の声がもっと大きくて、私達よりももっとロバの声に似ているってことがどうしたというのでしょうか。

それはともかく、私達はこの仕事を慎重にするように十分気をつけなけ

ればなりませんわ。そうすれば男達は、女元老院などという呼び方をしたり、あるいは特にほかの侮辱的な名称を考え出したりすることはなくなるでしょう。そうすれば、辛辣な皮肉屋さん達だって喜んで私達の中に居ることにもなるでしょう。たとえ、男達の民会が有益であるにしても、女達のほうはもっともっと有益だと見られることだって出来るようになるでしょうよ。

お坊様方が何年もの間、長きに渡って挑み合う以外の何もなかったことを私達は見せていただきましたわ。それに神学者の方々、司教様方、司祭様方、また一般の人々の間でも決して意見が一致することなどありませんでしてよ。「人の数だけ意見がある」⁽¹³⁾ わけですし、この方々自身、決して女性よりも首尾一貫しているなどということはありません。国と国、隣人と隣人の間に決して和解などありませんもの。それが間違っていないのでしたら、もし私達に主導権が託されるとしたら、人間の問題はもっと耐えやすいことになると思いますわ。でも、おそらく女の憤みが、こんな立派なお歴々をまるで愚鈍な人達だと理解することは許しませんわね。

それに、私の考えでは、ソロモン王が箴言第十三章にお書きになっていることを暗誦すべきだと思いますわ。「傲慢な人の間には常に喧嘩が絶えない。しかし、すべてのことを思慮をもって行う人は、知識によって正しく導かれる。」⁽¹⁴⁾ のですわ。でも、私はこれ以上前口上をのべて皆さんの邪魔をしてはいけませんわね。

一つ一つのことが秩序正しく、混乱もなしにすすめられていくために、どなたが協議に加わるべきで、どなたに遠慮してもらうか、まず検討することにいたしましょう。と申しますのも、あまり大勢の集団ですと協議というよりも騒動になってしまうでしょうし、またあまり少人数だけで同意してしまいますと、ある種の独裁になってしまいますから。私は処女をこの場に受入れないほうがよいと考えますわ。だって、彼女達に聞かせるにはふさわしくない多くのことが生じてくると思いますもの。

1. でも、いったいどんな証拠で処女かどうか見分けるとおっしゃるの。皆さ

エラスムスの *Senatulus* について

んがそうでおっしゃったならば、それで誰でも処女だというようにみられるのかしら。

- C. いいえ、でも私は、ただ結婚している女性だけが受け入れられるべきだと思いますわ。
- I. 結婚した女性の中にだって処女はおりましてよ。宦官の夫を持った方だっ
ていらっしやいますもの。
- C. 名誉ある方々の結婚は別ですわ。ですから結婚した女性が女であるとみな
されるのですわ。
- I. 処女以外にも外さなければ集団はやはりおおきくなりましてよ。
- C. 三度以上結婚した人も外すべきですわね。
- I. なぜかしら。
- C. いわば名誉職として引退すべきなのですわ。それに七十歳以上の方々につ
いても同じようにしていただきましょう。とりわけ、御自身の夫について
図々しくおしゃべりなどしないように決められなければいけませんわね。
身分にふさわしく節度をもってするのが当然というものでしょうから。
「何事も度を過ぎさず」⁽¹⁵⁾と申しますからね。
- C.A. 夫達は、私達のことをどこでもおしゃべりしているというのに、どう
してそれ以上に私達が彼らのことを話してはいけないのでしょうか。宅の
ティティウスなど、宴席を楽しく盛り上げようとして、夜私としているこ
とや、私の囁いたことなどを色々と想像を巡らして面白おかしく話してい
ますわ。⁽¹⁶⁾
- C. 本当のことを明らかにしたいと願うのでしたら、私達の面目は夫達にかか
っているというわけですわね。でも、私達が夫達と同じ立場に立つとしま
したら、それは自分たちの面目を自分で汚すだけのことじゃありませんか。
ところで、私達が不平の原因を少なからず持っていることが正当だとし
てもですよ、全体としてみれば、私達の立場のほうが夫達より勝っている
のですわ。あの方達は富を求めて、生命の危険をもかえりみずにすべての
土地や海を飛び回り、突然戦争が起これば合図のラッパで駆り立てられる

のですわ。それに私達が家で安穩としている間も無情な戦列に止どまっていなければならないんですわ。そして、もし法律に背きでもしようものなら、あの人達は厳しく処罰されてよ。私達は、私達の性の故にもっと大切に扱われますわ。ですから、大体相応しい夫を持つかどうかは、私達次第ということになるのですわ。私達はそんなことごさいませんが、あの方達には決着がつくまで丸々三カ月もの会議で争うような君主方、高官連や司教様方の代理人によって座る順序がきめられるようなことさえまだ残っているのですわ。そのようにして、上座の人がきっと高い位の人にちがいないなどと思うようになるのですね。その中でも四つもの高い位をお持ちの方が最も優れていて、次が三つ持っている方、次は二つ、そして一つ、最後に半分しか持たない方ということになるのですね。それぞれにどの地位かということは、その代々の家系によって決められるのですわ。ですから、私生児は最も低い地位を得ることになるのですし、もう一方の席には平民達が座を占めることになるのです。

私達の中では、たくさんの子供を生んだ人が最上の席を得ることになります。争いが生じたとしましたら、その場合には長老の方が収めることになるのですから。第三の席は、まだ子供を産んだことのない人達のものということにいたしましょう。

- C A. 夫を亡くした女はどうするのかしら。
- C. よいことを思い出させてくださいましたわ。その方々の場所は既婚女性の中に与えられるべきですわ。ただ子供を持っているとか、以前に持ったことがあればですがね。不妊の女性は最後の場所を占めることになると思いますわ。
- I. 司祭様方や修道士の奥方にはどんな場所を与えましょうかしら。
- C. そのことについては次の集まりの時によく考えることにいたしましょうよ。
- I. それでは、身体で稼いでいる人達についてはどういたしましょう。
- C. そんな人達を加えて、この元老院が汚されることは許せませんわよ。
- I. おめかけさんについてはいかがですか。

エラスムスの *Senatulus* について

C. そんな人達に一つの階級があるなんてことはございませんわよ。暇があれば考えることにしましょう。

ところで、元老院でどのようにして決議がなされるべきか考えておかなければなりませんわね。得点によるのか、石の投票にするか、あるいは声を出して投票するか、また採決にしますか。

CA. 石の投票ですと詐欺がおこりますわよ。それは得点でも同じことですわ。それに投票するために移動しなければならないとすれば、⁽¹⁷⁾ 私達は長い衣服を着ているのですから、大変なほこりが立ちましてよ。ですから一番いいのは投票の判断をはっきりした声ですることですわ。

C. でも、声を数えるなんてとても難しいことですわよ。それに大声を立てるなんてことはしないように注意すべきですわ。

CA. 失敗のないようにするためには、書記がいなければなりませんわ。

C. そうすれば、票決は数えられますわね。でも、どのようにして余分な騒音を除けばよいのでしょうか。

CA. たずねられもせず、自分の番でもなければ話さないようにすることですわ。ちゃんとなさらない方は議会から出ていっていただきましょうよ。それにここで扱われている問題についてベラベラおしゃべりする方は三日間の沈黙の罰を受けることにしたらよろしいと思いますわ。

C. ⁽¹⁸⁾ これまで、議会の方法について話されてまいりましたけれど、次にどのような問題が協議されなければいけないかお聞きくださいな。まず、私達の地位に関する問題を考えなければなりませんわね。特に、これまでなおざりにされてきた服装のことが問題ですわ。⁽¹⁹⁾ といいますのも、今では貴族と平民、既婚者と処女あるいは寡婦、家庭婦人と娼婦の見分けもつきにくくなってしまっているのですもの。

特に、貞淑さが失われてしましまして、誰でも何でも好きなものを使用するようになっていきますわ。平民や明らかに卑しい状態にあるような人達が、その夫は家で靴修理でもしているような時に、純絹の衣服や襷のついたものを身にまとい、花で飾ったり、縞模様のついたもの、上等の亜麻布

を着て、金、銀、毛皮等を身に付けていましてよ。それに指にはエメラルドやダイヤモンドがいっぱい輝いておりまして、今では真珠などは人々から鼻にも引っかけられなくなってしまいましたわ。琥珀色、珊瑚色それに金メッキのサンダルなどはいわずもがなですわ。これまでは女性の名誉のためにガードルには絹を使うとか、衣服の縁を絹の縁取りで飾るとかして満足しておりましたのに。今では二重の過ちがあるのですわ。まず第一に家庭が軽んぜられているということですし、それに貴族の守り手である階級が何だか分からなくなってしまっておりますわ。

もし平民達が象牙や上布で覆われた偽装馬車を使ったり、輿を使っているとしたら、高貴な者、権勢ある者にいったい何が残されているのでしょうか。それに、やっとのことでせめて騎士の妻になったような人が、十五尺もの引き裾を引いて歩くとしたら侯爵夫人や伯爵夫人はどうすればよろしいのかしら。それに驚くほど偶然に、ころころと衣服の様子が変わっていくなんてこともとても我慢ができませんわね。昔は亜麻布のかぶりものが頭上に突き出した角のようなものにかかっておりましたし、その飾りを見て平民達はその女性が貴族であると確認したものですわ。それに相応しくない女達は外では白の毛皮にいろんな模様の黒い斑点のついたフェルト頭巾をかぶっていましたわ。平民達はそのことをしっかりと承知していたのです。ところが服装が変わって黒い布製のヴェールをかぶるようになりますと、平民の女達はそれを真似ようとしただけではなく、金や拳句の果ては宝石などで縁飾りを付けるようにさえなったのですわ。

以前は貴族だけが髪を額やこめかみより上にあげて頭の上でまとめるような髪型をしておりました。長いこと誰でも好きな人はすぐにそれを真似ることなど許されませんでしたわ。ところがどうでしょう、平民達はすぐに真似をし始めましてよ。

それに、御伴や先駆けを連れていたのは、昔でしたら高貴な夫人だけでしてよ。どこかに上がろうとすれば、その中の美しい人が手を伸ばして助けてくれましたし、歩きやすいように右手を添えてくれたものですわ。生

エラスムスの *Senatulus* について

まれのよい者以外にはそんな名誉は許されておりましたわ。今では、どこの奥様方も同じように振る舞い、後ろから引き裾を運ばせるようなことまで好きにしておいでですわ。それに、昔は高貴な人々だけが挨拶を交わすのに接吻しておりました、誰でも好きな人を接吻で迎えたり、誰にでも右手を差し出したりはしませんでした。それなのに、今では皮のような臭いを放っている人達が高貴な女性の接吻を求めるのですわ。

夫婦の間にも重んぜられるべき品位が失われてしまっております。貴族が平民と結婚しますし、平民も貴族と結婚しますわ。そのようにして、私達には混血児が生まれるようになったのですね。それで、どんな人も身分の低い生まれの人などいなくなるわけですから、高貴な人々が使っている化粧品を使うことなど、誰も何とも思わなくなってしまったのですわね。平民達は新鮮なビールの泡や樹木から剥ぎ取った樹皮の新鮮な樹液、その他もっと容易に手に入れやすいようなもので満足すべきだったのですわ。口紅や白粉、頬紅その他の優雅な化粧品は高貴な女性のために取っておかれたものでしたわ。

今では、パーティーや公の行進の時でさえも順序なんてどうでもよくなってしまったじゃございませんか。両親の血筋の故に高貴な生まれの人がいても、商人の妻が道をあけずに知らん顔なんてことが、しばしばおこっておりますわ。ですから、そのような事柄自体が、他のことについても私達にしっかりするように促しているのですわ。それに、そんなことはただ女性だけに関係する問題なのですから、私たちの間で容易に決められることですわね。

ところで、私達をすべての価値あることから遠ざけて、まるで洗濯女か料理人のように扱っている男達のことでも当然論ずべきだと思いますの。だって、あの方達は御自分達のためにすべてを意のままになさっているのですからね。公的な職権や戦争の指揮等のことはあの方達におまかせすればいいのですわ。ただ、たとえ妻の立派さが夫の三倍も優っていたとしても、いつもそれが陰に隠されてしまうというのはいったい誰がそうしてい

るのでしょうかしらね。

また、愛しい子供を嫁がせる時に、母親が意見を述べる権利を持つことは当然のこととしてよ。私達が説得しようとしているのはそのようなことなのですわ。つまり、公職につくかわりに、都市の中で武器を取らずに出来ることをするという権利なのです。このようなことこそ論議し甲斐のあることだと私には思えるのですわ。

その上更に論議すべきことは、何であれ一つ一つこの元老院の議決で決められるべきですわ。それに、もし皆さんの中でどなたか、違うお考えをお持ちでしたら、また明日論ずることにいたしましょう。会議が終わるまでは毎日集まることになりますわ。発言されたことは一つ一つ記録しなければなりませんから、四人の書記を採用しなければなりませんわね。それに、発言を許可したり、禁じたりするために、二人の司会者も必要ですわ。この人達が裁定者 (*divinatio*)⁽²⁰⁾ として許可を与えるのです。

エラスムスの *Senatulus* について

【注】

- (1) Juvenalis, Decimus Junius (A.D. 1世紀後半－2世紀前半)
 トラヤヌス帝、ハドリアヌス帝治世下のローマで活躍した風刺詩人。激しい風刺や寸鉄のように人を刺す作風で有名である。
- (2) De utilitate colloquiorum. LB. Tom. I. p. 906
 vitia quaedam mulierum (ある種の女性達の欠点) は、論議の展開の仕方の中にも見て取れるし、あるいはコルネリアの服装に関する発言の中に見られる虚栄心を指しているとする取捨もできる。しかし、表現の随所に男達への皮肉がしばしば見出されることに注意して読む必要がある。
- (3) アリストファネス『女の議会』（『ギリシャ喜劇全集』第二巻 人文書院 1961 p.235-323）は、紀元前392年に上演された作品とされている。アテネの民主制の進展が、逆に女性の社会的地位の低下を生み出していた中で、議会を男性の手から女性の手に取り戻すという倒錯劇を書いたのである。
- (4) アリストファネスの用いている ἐκκλησία は、一般的には公共の場に呼び出された市民達の集まりとしての民主政体の議会と理解できる。一方エラスムスの用いている συνέδριον はユダヤのサンヒドリン（70人議会）等に用いられている概念である。
- (5) Craig R. Thompson. *The Colloquies of Erasmus*.
 The Univ. of Chicago Press 1965 p.441.
- (6) 新共同訳では「同じように、婦人は慎ましい身なりをし、慎みと貞淑をもって身を飾るべきであり、髪を編んだり、金や真珠や高価な着物を身につけたりしてはなりません」となっている。エラスムスは、このテキストの注解において、「慎ましい身なり」をとりあげ、ウルガータ訳では in habitu ornato（慎ましい衣服）となっている訳を in amictu ornato と訂正するほうがふさわしいとして、特に意のままに身を飾る英国やイタリアの女性に対する指示としては十分ではないからであると述べ、パウロが女性に amictu ornato を用いるように命じているのはその生活が潔白で

あり、女らしい羞恥心が表に証明されるためであり、下品な服装を用いないように注意するためであるとして、この *amictus* を全体的なたしなみとして用いている。更に1519年の第二版においては、トマス・アクィナスがそれについて「心の内的飾り」という哲学的思考を加えていることが付加されている。LB. Tom. VI. p.932.

(ed.) Anne Reeve, *Erasmus' Annotations on the New Testament. Galatians to the Apocalypse, Facsimile of the final Latin Text with all earlier Variants.* E. J. Brill 1993 p.668-669.

- (7) 「糸巻き棹や織機の前に座って……云々」という表現は、古代社会以来変わっていない女性の立場を象徴的に表現するものであり、この後の台詞全体を導き出していく伏線にもなっている。この状態は、アリストファネスが『女の議会』を書くに至った女性の社会的地位と同質のものといわねばならない。
- (8) *Salus autem ubi multa consilia.* 「されど多くの助言あるところには安全あり」本来は、箴言11：14の諺、*Ubi non est gubernator, populus corruet; salus autem, ubi multa consilia.* の後半をとったもの。
- (9) コルネリアは *coimus*(*coeo*)「協力する、同盟する」(「団結する」と訳した用語)という思い切った表現を使っているが、マルガレータは全く別の意味に受けとっており——例えば、単なる井戸端会議のおしゃべりのためというような——、このような中に「ある種の欠点」を表現しようとしたのかもしれない。
- (10) *Heliogabalus* (? - A.D.222) シリア生まれで、太陽神エラガバルスの祭司となり、後ローマ皇帝となった人物。奢侈な生活と専制政治を行い、太陽神崇拜をローマ政治の中心においたが、他宗教には寛容であり、ユダヤ教、キリスト教にも寛大であったといわれている。軍隊の暴動により殺害された。
- (11) *quem illae cotumeliae causa Chrestum vocabant.* と表現してある *contumeliae causa* (軽蔑するため)が *Chrestum* と結びついているの

エラスムスの *Senatulus* について

はよく知られている。Χρηστός は本来的には「善い」ことを指すものであるが、軽蔑的に、変なもの、厄介なものを示すために用いられてきた。

(12) コリント第一の手紙14 : 34-35

(13) quot homines, tot sententiae (「人々の数だけ、意見の数あり」) エラスムスが好んで用いる諺。例えば、Synodus grammaticorum の中でも用いられている。拙論参照。「エラスムスの *Synodus grammaticorum* (1529) について」『神学研究』第42号 1995 p.93

(14) 箴言13 : 10 新共同訳では「高慢にふるまえば争いになるばかりだ。勧めを受け入れる人は知恵を得る」とある。

(15) Ne quid nimis 「何ものも度を過ぎさずに」 テレンティウスの主要作品 *Andria* の中からとられた格言。原語は *μηδέν ἄγαν*。

(16) 寝室での夫婦の秘事について、エラスムスは、人前で言い触らすようなことではないと、次のように語っている。

「自分たちの性交の様子を他人の前で言い触らすことは適当なことではない。寝室やベッドの中でのことを何でも、また誰の前でも宴席や対話の中で自慢げに語る者はみっともないことをしているのである。酒宴の席でいわれたことが広められて恥ずかしいのであれば、寝室やベッドの中でのことを秘密にしておかないのはもっと恥ずかしいことである」

Lingua sive de linguae usu atque abusu liber utilissimus.

LB. Tom. IV. p.686.

(17) *si pedibus eatur in sententiam* と表記されている文章。pedibus eo in sententiam (「私は動議に投票する」) の変形で、エラスムスは彼の『格言集』*Adagiorum* の中でこれを取りあげて、さまざまな用例を説明しているが、投票のために移動するという意味を明らかに示している。

LB. Tom. II. p.616

(18) このコルネリアの発言は、最新の校訂版全集 (ASD 版 I - 3、p.632) では、その前のカテリーナの発言がそのまま続いているような形式をとっている。しかし、LB版は勿論、1679年、アムステルダム版においてもコ

ルネリアの発言として扱っている。Thompson の英訳もコルネリアを採用している。しかも校訂版全集では、それについての何の注記もなされていないので不注意からくる単純な過ちと思われる。

- (19) エラスムスは『キリスト教的結婚の手引き』 *Christiani Matrimonii Institutio* を書き、その中でも注・6 で取り上げた「テモテへのパウロの第一の手紙」 2 : 9 及び「ペトロの第一の手紙」 3 : 1 - 5 を引用して女性の服装について慎ましさと内面の大切さを語っている。このように、この問題についてエラスムスは深い関心を持っていたことが伺われる。LB.Tom. V. p.684. 参照の事。
- (20) *divinatio* を「裁定者」と訳した。これは、ある訴えに対して複数の代弁人が結論を出すための事前協議をする時用いられる用語であるという。研究社の『羅和辞典』では、予言、予感、神占と同時に告訴（発）者の選定という意味が記されているので、上記の訳を選んだ。